

## イタリア語の語尾切断現象 (2)

— 名詞・形容詞・副詞・前置詞・接続詞の語尾切断 —

上野貴史

### Il Troncamento della Lingua Italiana (2)

Takafumi UENO

In questo studio, analizzo il troncamento di sostantivo, aggettivo, avverbio, preposizione, e congiunzione dal lato fonologico, morforlogico, e sintattico, usando i dati raccolti dalle opere del Leopardi. I risultati sono come segue; <+TR> (a) la vocale finale *-e* o *-o* (b) il caso in cui la consonante seguente è più forte nello strato consonantico (c) il caso in cui la 'consonante seguente' è il suono sordo (d) il sostantivo maschile singolare (e) l'aggettivo singolare (f) N di N+ADJ (g) ADJ di ADJ+N (h) l'avverbio, la preposizione, e la congiunzione che ha strette relazioni con una parola seguente; <-TR> (a) la vocale finale *-a* o *-i* (b) una consonante *-m* davanti alla vocale finale (c) il caso in cui la consonante seguente è fonologicamente prossima ad una consonante davanti alla vocale finale (d) il caso in cui il 'suono iniziale' seguente è la vocale, *s* impura (e) il caso in cui il sostantivo seguente accentua la vocale finale (g) il sostantivo plurale (h) l'aggettivo plurale (i) N di ADJ+N (j) ADJ di N+ADJ (k) l'aggettivo usato come un complemento attributivo (l) N di NP senza le parole modificate.

Come si suol dire, l'uso del troncamento è in sensibile declino nell'italiano moderno. Ma il fenomeno è successo nel processo del mutamento linguistico nelle lingue molte. Nel'italiano d'oggi, ci sono non poche parole che si usano solo come la forma troncata. Penso che è importante esaminare il fenomeno così non solo dal lato fonologico ma anche dal punto della non-fonologia.

## 1 はじめに

イタリア語の *troncamento* は、多くの場合、任意に起こる (*facoltativo*)<sup>1)</sup> 現象であると考えられている。

- (1) *la maggior vita degli animi* (*Operette Morali*, 以下 OP と略記, p. 642)

「精神というよりすぐれた生氣」

- (2) *quella maggiore grandezza d'animo*

(OP, p. 723)

「精神のあの大きな雄大さ」

(1), (2)は両方とも形容詞 *maggior* (e) の直後に女性名詞が連続して名詞句 (NP) を形成しているにもかかわらず, (1)では *troncamento* の形態 (+TR) で出現しており, (2)では *troncamento* が起こっていない形態 (-TR) で *maggior* (e) が出現している。

上野 (1992) では、動詞に限定して、音韻・形態・統語的な側面からこの+TRの考察を行った。この中で、音韻的には、後続する語の語頭音との関係、また統語的には、より密接度の高い (使用頻度の高い) 統語連続の場合にこの現象が起こることなどを述べた。

本稿では、動詞の場合の分析を踏まえて、名詞・形容詞・副詞・前置詞・接続詞の *facoltativo* の *troncamento* がどのような状況に起こるかを分析し、その傾向を考察していくことにする。

## 2 分析

本稿でも動詞の場合の分析と同様に、Leopardi の二つの散文作品からデータを収集し、音韻・形態・統語の三つの側面からこの現象を分析していくことにする。二つの作品の中で名詞・形容詞・副詞・前置詞・接続詞の *troncamento* の用例は、OP が383例、PE (*Pensieri*, 以下 PE と略記) が85例、合計468例である。

### 2.1. 音韻的側面

#### 2.1.1. 切断音

まず、*troncamento* されている語末母音を示したものが <表1> である。切断音は音節切断の -de を含めて、-e<sup>2)</sup>、-o、-a、-i の4種類存在する。そこで、切断母音、-e から順に例文と照合せながら考察していくことにする。

表1 語末の切断音

作品 切断音	OP	PE	合計
-e	268	56	324
-o	47	6	53
-a	12	—	12
-i	6	1	7
-de	50	22	72

#### 2.1.1.1. -e

語末母音 -e が切断されている語の中で、頻度数5以上出現しているものは、以下の通りである。

qual	75例
maggior	75例
gran	72例
ben	41例
pur	36例
tal	28例
amor	17例
miglior	8例
cotal	7例
minor	7例
mal	6例

<表1> で示したように、-e の切断は全体の84.6%を占める。動詞の -e の切断音の割合<sup>3)</sup> から考えても、*troncamento* は語末母音が -e であるときに起こりやすいということが言える。また、(3)のように +TR でほとんど出現しないような語<sup>4)</sup> が -e の切断ではしばしばみられる<sup>5)</sup>。

- (3) *eccetto il timor*<sup>6)</sup> delle cose di un altro mondo (OP, p. 888)

「別世界の物事に対する懸念を除いては」

2.1.1.2. -o

-oの切断は全体の11.3%を占め、-eの切断に続いて頻度が高い切断母音である。また、動詞の場合の切断音においては-eと-oの切断で100%を占めたが、動詞以外の品詞の場合においてもこの-eと-oの切断で全体の96.0%を占める。この-oが切断されている語で複数個出現したものは、以下の通りである。

buon <sup>7)</sup>	15例
mal	11例
men	10例
fin	8例
lor	4例
bel	3例

(4) di *buon* grado (PE, p. 1162)

「喜んで」

2.1.1.3. -a

-aの切断は、orが9例、その合成語である*ancor*が3例収集できた<sup>8)</sup>。これら以外の語で語末母音-aは切断されておらず、動詞の場合と同様、-aは切断されにくい音韻であることが分かる。

(5) non solo vorranno sedere *ancor* esse e riposarsi (OP, p. 867)

「彼女たちは再び腰掛けて休憩するだけでなく」

2.1.1.4. -i

Ceppellini (1990) では、切断される音韻は-e, -o, -aであるという記述<sup>9)</sup>があるが、筆者の収集したデータには、-iの切断が見られた<sup>10)</sup>。切断の起きている語は*fuor*の1種類である。

(6) senza necessità e *fuor* di luogo (PE, p. 1176)

「不必要かつ場違いで」

2.1.2. 直前音

次に *troncamento* されている直前の子音を調

査したものが<表2>である。直前の子音については、2.1.1.の切断音で見られたような優位性は確認されず、r, l, nの直後ではほぼ均等に切断が起きている。また、動詞の場合と同様にmの直後での *troncamento*<sup>11)</sup> は1例も見られなかった。

表2 *troncamento* 直前の子音

作品 直前音	OP	PE	合計
r	154	34	188
l	102	26	128
n	127	25	152

2.1.3. 後続音

+TRに後続する語の語頭音を調査したものが<表3><表4><表5>である。<表4>から頻度の高い音ほど *hierarchy*<sup>13)</sup>の強い音であること、<表5>から有声音に対する無声音の優

表3 +TRの直前音と直後の音韻

直前音 直後の音韻	/r/(%)	/l/(%)	/n/(%)	合計(%)
pausa	—	—	0.7	0.2
/a/	—	5.5	2.0	2.1
/i/	1.1	—	0.7	0.6
/u/	0.5	—	—	0.2
/e/	0.5	1.6	2.6	1.5
/o/	1.1	—	—	0.4
/p/	22.9	10.2	14.5	16.7
/t/	3.7	4.7	11.2	6.4
/k/	13.8	24.2	14.5	16.9
/b/	4.3	1.6	4.6	3.6
/d/	16.0	8.6	5.9	10.7
/g/	1.6	7.8	2.0	3.4
/f/	4.3	3.1	7.2	4.9
/s/	6.4	13.3	7.2	8.6
/v/	4.3	2.3	5.3	4.1
/ts/	1.1	—	0.7	0.6
/dz/	—	3.1	2.6	1.7
/r/	—	—	3.3	1.1
/l/	3.2	0.8	8.6	4.3
/λ/	—	—	0.7	0.2
/m/	6.9	10.9	4.6	7.3
/n/	8.5	2.3	1.3	4.5

表4 調音の様式

直前の音韻 直後の音韻	/r/(%)	/l/(%)	/n/(%)	合計(%)
	破裂音	62.2	57.0	52.6
摩擦音	14.9	18.8	19.7	17.5
鼻音	15.4	13.3	5.9	11.8
流音	3.2	0.8	12.5	5.6
母音	3.2	7.0	5.9	5.1
破擦音	1.1	3.1	3.3	2.4

minor 46.7% 53.3%

これらの語はいずれもこの統語状況<sup>15)</sup>でNPを形成する場合、+TRの形態で出現する割合が非常に高い。そのため、これらの形容詞はobbligatorioにtroncamento現象が起こる定冠詞や不定冠詞とたいへん近いものであると言える。しかしながら、-TRとしてもこの形容詞は出現しており、+TRと-TRとの間で揺れが見られる。次に、このNPのNがどのような音韻的特質を持っているかを以下に示す。

表5 無声音と有声音の対立<sup>12)</sup>

直前の音韻 直後の音韻	/r/(%)	/l/(%)	/n/(%)	合計(%)
	無声音	52.1	55.5	55.3
有声音	26.1	23.4	20.4	23.5

	+TR	-TR
ADJ+C <sup>16)</sup>	252例	15例 <sup>17)</sup>
ADJ+V <sup>18)</sup>	2例	61例
ADJ+ACCENTO <sup>19)</sup>	2例	9例
ADJ+s impura <sup>20)</sup>	0例	16例

位性があることが分かる。従って、動詞の場合と同様に、この後続音の調査結果から、a) 直後の語頭音が hierarchy における強い音の場合に+TRになる b) 直後の語頭音が直前の音韻と音韻特性が近い場合は+TRは起こりにくい c) 有声音に対して無標(unmarked)である無声音が後続の語頭音である場合に+TRが起こりやすい、ということが指摘できる。

ここで、さらに+TRと直後の音韻との関係を考察するために、「+TRの形容詞(ADJ)+名詞(N)」の語順で名詞句を形成するものを分析してみる。そのために、この中で頻度の高い形容詞7語<sup>14)</sup>を取り上げる。まず、これらの語がこの統語状況で+TRで出現する割合を以下に示す。

	+TR	-TR
qual	67.7%	32.3%
maggior	75.0%	25.0%
gran	80.9%	19.1%
tal	58.3%	41.7%
miglior	80.0%	20.0%
cotal	100.0%	0%

このことから以下の3点が指摘できる。

a) 後続の名詞の語頭音が母音である場合は、ほとんどが-TRとなる。

(7) egli ottenne *maggiore imperio* (OP, p. 597)  
「彼は大きな権力を握った」

b) 後続の名詞の語頭が s impura である場合は、-TRとなる。

(8) è *grande stoletezza* (OP, p. 780)  
「それは本当に愚かなことだ」

c) 後続の名詞のアクセントがその名詞の語末母音にある場合は、ほとんどが-TRとなる。

(9) *minore vitalità* e sentimento (OP, p. 646)  
「最小限の生命力と感覚」

以上のように、+TRと-TRとの選択は、後続語の語頭音や後続語のアクセントの位置などに大きく依存していることが指摘できる。

## 2.2. 形態的側面

形態的側面では、数（numero）によって語尾変化する名詞と性（genere）・数によって語尾変化する形容詞の形態について考察する。

### 2.2.1. 名詞

まず、troncamento が起こっている名詞形態を示す〈表6〉<sup>21)</sup>。〈表6〉から分かるように名詞の+TRの出現形態は、男性名詞がほとんどである。女性名詞は *ragion* (OP, p. 837) と *mutazion* (OP, p. 884) の2例のみである。この女性名詞の頻度の低さの理由として、女性名詞の語尾が -a で終わる語が多いということが挙げられる。また、音韻的側面で接続語の語頭音が unmarked（無声音）の時に+TRが出現すると同様に、形態的側面では複数形態に対して unmarked<sup>22)</sup> である単数形態にこの現象が起こっている。この単数形態のみに+TRが出現することは、動詞の+TRの形態がほとんど不定法不定詞であることと同一の理由を持つと考えられる。すなわち、活用語尾に numero の概念が名詞には含まれるため<sup>23)</sup>、troncamento が起こり語尾のこの概念が不明瞭になるのを避けているのである。

表6 +TRの名詞形態

genere numero	男性名詞	女性名詞
単数形	42	2
複数形	—	—

### 2.2.2. 形容詞

次に、形容詞の形態であるが、形容詞の語尾変化はそれが修飾する名詞などに一致するため、まず ADJ+N<sup>24)</sup> の名詞の形態を以下に示してみる。

ADJ+MS	154例
ADJ+FS	138例
ADJ+MP	3例

ADJ+FP<sup>25)</sup> 1例

形容詞は、後続する男性名詞と女性名詞がほぼ同頻度で見られるため、genere には無関係であると言える。また、名詞の場合での指摘と同様、unmarked（単数形態）に troncamento が起こっている。しかしながら、名詞の場合とは異なり、後続名詞が複数形の例が *lor* の troncamento に4例見られる。これは、*lor* が修飾する名詞の numero, genere にかかわらず語尾の変化をしない形容詞であり、他の形容詞に見られるような不明瞭さを避けることが可能であるためと考えられる<sup>26)</sup>。

(10) *i lor mari* (OP, p. 867)  
「彼らの海」

### 2.3. 統語的側面

最後に、+TRの統語的な側面を考察する。

#### 2.3.1. 名詞・形容詞

名詞が+TRとして出現しているものは45例あり、その場合の統語的状況を示すと以下のようになる。

N+ADJ	31例
N+di <sup>27)</sup>	8例
N+IF <sup>28)</sup>	3例
S <sup>28)</sup>	2例
N+ADV <sup>28)</sup>	1例

同様に、形容詞が+TRとして出現している例は307例見られ、その場合の統語的状況は以下の通りである。

ADJ+N	296例
qual si sia <sup>30)</sup>	11例

名詞・形容詞いずれの品詞においてもNとADJを含むNPの最初の品詞に+TRが起こる頻度が高い。つまり、

- (1) un *pensier vile* (OP, p. 845)  
「臆病な考え」
- (2) la *maggior parte dell'animo nostro*  
(OP, p. 710)  
「我々の精神の大部分」

(1)は、N (*pensier*) + ADJ (*vile*) の N が、そして(2)は ADJ (*maggior*) + N (*parte*) の ADJ が +TR として出現している。

逆に、名詞の場合は名詞単独のNPや ADJ+N で出現する場合、また形容詞では補語やN+ADJ で出現する場合など、個々の語の独立性が高いものや後ろに密接な関係を形成する語が連続しない場合には起こらない。

2.3.2. 副詞・前置詞・接続詞

副詞では84例、前置詞では16例、接続詞では16例、+TRとして出現している例が見られた。これらの品詞では、慣用的な表現での出現が多くみられる。例えば、前置詞の統語状況は、以下の通りである。

- fin qui 8例
- fuor di 6例
- fuor che 1例
- insin qua 1例

fin qui は8例すべて、four di は27例中6例が +TR として出現している。このように頻繁に起こる統語連続の場合に、これらの品詞は +TR として出現している。

このような各品詞の出現頻度から、+TR は後続する語と深く関係すること、そしてそれ故に独立性の強い副詞などには起こりにくいということが指摘できる。

2.3.3. 複数品詞を持つ語の *troncamento*

*troncamento* が起こる語は基本的な語が多く、一つの語に複数の品詞を持つものが少なくない。そこで、このような語の +TR 形態がどのような品詞として出現しているのかを考察するために、fuor の例を挙げる。本稿で収集したデータの中

では、fuor (i) は48例見られ、そのなかで *troncamento* が起こっているのは7例である。この fuor (i) について品詞の調査を行った<表7>。+TR の形態である four はすべて前置詞として出現しており、副詞には全く見られない。このことから、独立性の高い品詞である副詞には *troncamento* は起こりにくいということが言えると思われる<sup>31)</sup>。

表7 fuor (i) の品詞

品詞 形態	前置詞	副詞
fuori	25例	16例
fuor	7例	—

3. 結 語

以上、Leopardi の散文をデータとして、+TR と -TR の分析を行った。ここで、本稿で指摘した +TR と -TR の傾向をまとめておく。

+TR

- a) 切断母音が -e, -o
- b) 後続の語頭音が音の hierarchy の強い場合
- c) 後続の語頭音が無声音
- d) 単数男性名詞
- e) 単数形態の形容詞
- f) N+ADJ の統語連続の N
- g) ADJ+N の統語連続の ADJ
- h) 密接度の高い統語連続の副詞・前置詞・接続詞

-TR

- a) 切断母音が -a, -i
- b) 直前の子音が m
- c) 後続の語頭音と直前の音韻との音韻特性が近い場合
- d) 後続の語頭音が母音
- e) 後続の語頭音が s impura
- f) 後続の名詞が語末にアクセントを持つ場合
- g) 複数形態の名詞

h) 複数形態の形容詞

i) ADJ+N の統語連続の N

j) N+ADJ の統語連続の ADJ

k) 補語として機能する形容詞

l) 修飾語を伴わない NP の N

無論、このような音韻・形態・統語的な要因が相関して *troncamento* が起こると考えられるが、この現象を大きく集約すると a) 後続語に大きく依存している b) 切断音は音韻的にも形態的にも unmarked である、という二点になろう。

*troncamento* 現象は、現代イタリア語では著

しく衰退していると言われている<sup>32)</sup>。しかし、言語の変遷において多くの言語に語尾切断という現象が見られ<sup>33)</sup>、またイタリア語においても *troncamento* の形態が固定化し -TR では出現しない語彙も多く見られる。また、副詞の語形成や複合語の語形成<sup>34)</sup>などは *troncamento* と大きく関連している。このような現象を単なる音韻変化として捉えるだけでなく、非音韻的な観点からも考察することは、大変重要なことだと思えるのである。

## 註

- 1) *troncamento* には、義務的に起こるもの (*obbligatorio*) と任意に起こるもの (*facoltativo*) が存在するが、本稿では *facoltativo* に起こる *troncamento* を分析するため、定冠詞・不定冠詞・不定冠詞と同様に変化し規則的に切断現象を起こす語 (*verun, alcun, niun, ciascun* など)・定冠詞と同様に変化する語 (*bel* など) はデータとして扱わない。
- 2) 音節切断の -e は語末母音が /e/ であるので、-e の切断として分析する。
- 3) 動詞の場合の -e の切断音の占める割合は、97.6% である。
- 4) “La maggioranza delle parole elise o troncate appartengono al primo migliaio di parole su una lista di frequenza.” (Mańczak, 1978; 75)
- 5) -e の切断は31の異なり語数を持ち、多くの種類の語に *troncamento* が起こっていることが分かる (-o: 9, -a: 2, -i: 1)。
- 6) イタリア語の頻度辞典である *Lessico di Frequenza della Lingua Italiana Contemporanea* で *timore* は 1742 番目の頻度順位として記されている。
- 7) *buon* は一般的に *obbligatorio* として扱われるが、筆者の収集したデータでは、かなりの例外が見られたので、*facoltativo* として扱う。
- 8) これは、Fogarasi (1983: 27) の “nell'avverbio *ora* e nei suoi composti” という記述に適応している。
- 9) “Il *troncamento* si verifica solitamente quando la vocale finale è una *e* o una *o*; se è una *a*, la parola si tronca solo in *ora*, *suora* e nei composti di *allora* e *ancora*.” (Ceppellini, 1990: 515)
- 10) Fogarasi (1983: 27) でも、“La vocale colpita deve essere sempre una vocale atona” とあり、-i の切断についてその存在は否定していない。
- 11) “Nel caso di *m* l'apocope-sostanzialmente limitata alla 4<sup>a</sup> persona dei verbi-è rara.” (Fogarasi, 1983: 27)
- 12) この無声音と有声音の対立の表は、破裂音・摩擦音・破擦音を対象にしている。
- 13) Hawkins (1984: 66) を参照。
- 14) *buon* は頻度が高いが、後続の名詞が男性名詞に限定されることからここでは扱わない。
- 15) ここでは、ADJ+N の語順になって出現する形容詞を対象としている。なお、音韻的な条件に焦点を当てるため N が複数形で出現している例は扱わない。
- 16) 形容詞の後ろに *z, s, impura, gn, pn, ps, x* 以外の子音で始まる名詞が後続することを示す。
- 17) ADJ+C で ADJ に *troncamento* が起こっていない名詞は、*decadimento, lunghezza, rocca, grandezza, perfezione, tristezza, negligenza, beneficio, differenza, risoluzione, rappresentazione, sentimento, cultura, dimostrazione, documento* などである。これらの名詞には、多音節の名詞が多い。
- 18) 形容詞の後に母音で始まる名詞が後続することを示す。
- 19) 形容詞の後ろに語末の母音にアクセントを持つ名詞 (*infelicità, necessità, utilità* など) が後続することを示す。

- す。
- 20) 形容詞の後ろに z, s impura, gn, pn, ps, x で始まる名詞が後続することを示す。
  - 21) ここでは、関係代名詞として出現している qual の 1 例は除外している。
  - 22) marked (有標), unmarked は、一般的に音韻的なものに対する用語であるが、本稿では形態的にも複雑で一般的でない特徴を持つものを marked, 単独で一般的な特徴を持つものを unmarked と呼ぶことにする。
  - 23) 動詞の活用語尾には、numero に加えて人称 (persona) の概念が含まれる。
  - 24) 本稿で収集したデータには形容詞は307例見られたが、その中で296例が ADJ+N の語順で出現しているため、ここではこの統語構造のみを分析する。
  - 25) MS は男性単数名詞, FS は女性単数名詞, MP は男性複数名詞, FP は女性複数名詞を示す。
  - 26) しかしながら, loro の troncamento の形態である lor はここで示した 4 例のみであり, 決して頻度は高くない。
  - 27) この中には, di の冠詞前置詞の例も含めている。N+di の統語連続は N+ADJ に続いて頻度が高い。di が形成する前置詞句 (形容詞句) は N の属性を意味し, 統語的には N+ADJ とは異なるが, 意味上は形容詞に類似している。
  - 28) IF は動詞の不定法不定形, ADV は副詞を示す。この N+IF と N+ADV の N は動詞の不定形の名詞的用法であるためこのような統語連続として出現している。しかしこれらは, 統語的には動詞に準じるので, ここではこれ以上取り扱わない。
  - 29) S は名詞が修飾語を伴わず, 主語として出現しているものを示す。
  - 30) この qual は不定形容詞として出現しており, 現代イタリア語では qualsiasi の一語で示されるが, Leopardi の作品では qual si sia の形態で出現している。
  - 31) Mańczak (1978: 76) では, 次のように述べている。"Se ci sono due parole italiane che provengono dallo stesso etimo latino, la parola più usata presenta, in genere, una riduzione più frequentemente della voce meno usata."
  - 32) "L'uso dell'elisione e del troncamento, nell'italiano d'oggi, è in sensibile declino anche nell'impiego più strettamente letterario, per non parlare della prassi linguistica degli ambienti tecnici e giornalistici" (Fogarasi, 1983: 79)
  - 33) 古英語から現代英語への移行の際にもこの現象が見られる。  
例, singe → sing
  - 34) 例えば, 形容詞を並列させて複合語を形成する場合。  
例, nazional-popolare, balnear-familiare

### 例文出典

Leopardi, Giacomo. 1984. *Opere*, a cura di Mario Fubini. Classici Utet.

### 参考文献

- Bortolini, U., C. Tagliavini, & A. Zampoli. 1972. *Lessico di Frequenza della Lingua Italiana Contemporanea*. Garzanti.
- Cepellini, Vincenzo. 1990. *Dizionario Grammaticale*. De Agostini.
- Devoto, Giacomo. 1984. *Il Linguaggio D'Italia*. Biblioteca Universale Rizzoli.
- Fogarasi, Miklòs. 1983. *Grammatica Italiana del Novecento*. Bulzoni Editore.
- Hawkins, Peter. 1984. *Introducing Phonology*. Hutchinson.
- Leone, Alfonso. 1963. *Elisione e Troncamento*. *Lingua Nostra* 24.
- Lepschy, Anna Laura & Giulio Lepschy. 1984. *La Lingua Italiana*. Bompiani.
- Mańczak, Witold. 1978. *Correlazioni tra Forme Tronche e Elise e loro Frequenze nell'uso*. *Lingua Nostra* 39.
- Migliorini, Bruno. 1983. *Storia della Lingua Italiana*. Sansoni Editore.



上野：イタリア語の語尾切断現象（2）

Renzi, Lorenzo. 1988. *Grande Grammatica Italiana di Consultazione*. Il Mulino.

Schane, Sanford A. 1973. *Generative Phonology*. Prentice-Hall.

Serianni, Luca. 1988. *Grammatica Italiana*. Utet.

Trabalza, C. & E. Allodoli. 1955. *La Grammatica degli italiani*. Le Monnier.

上野貴史. 1992. 「イタリア語の語尾切断現象（1）」『大阪女子短期大学紀要』第17号. pp. 79-87.

———, 1993. 「イタリア語における切断現象と使用頻度」『ニダバ』（西日本言語学会）第22号. pp. 103-111.